慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「存在論」の構造変化の研究 : 初期存在論とデカルト主義哲学の交錯とその展開の分析
Sub Title	Research on the structural change of ontology : analysis of the interaction of early ontology and Cartesianism
Author	今井, 悠介(Imai, Yusuke)
Publisher	
Publication year	2023
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2022.)
JaLC DOI	
Abstract	初期存在論の代表的哲学者であるクラウベルクの存在論を中心に、存在論の創始者ティンプラー、およびゴクレニウス、アルステッド、カロフといった初期存在論の哲学者、およびヴォルフ、バウムガルテンの存在論のテキストを、17世紀初頭から18世紀半ばにかけて成立した新たな学問である「存在論（オントロギアOntologia）」の生成と展開の過程として分析する研究を行なった。思考上の存在を含む存在者の一般属性論として、伝統的形而上学を引き継ぎつつ始まった「存在論」が、クラウベルクの主著『オントソフィア』第2版を嚆矢として、同じく17世紀に始まったデカルト主義哲学と交錯し、融合していく過程を部分的に明らかにした。 The aim of this research project is to analyze the origin and development of Ontology (Ontologia), a new discipline that emerged from the early 17th century to the mid-18th century. In order to accomplish this, we have scrutinized the writings of prominent figures in early Ontology such as Clauberg, who is considered one of the leading philosophers in the discipline, as well as Timpler, the founder of Ontology. Additionally, we have analyzed the works of early Ontological philosophers including Goclenius, Alsted, and Calov along with those of Wolff and Baumgarten. Our research has provided partial insights into the process through which Ontology, initially conceived as a theory concerning the general attributes of beings , including those of beings of thought, taking over some elements of traditional metaphysics, intersected and merged with Cartesian philosophy. This transformation began with the second edition of Clauberg's influential work, Ontosophia.
Notes	研究種目：若手研究 研究期間：2019～2022 課題番号：19K12930 研究分野：哲学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_19K12930seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１２９３０

研究課題名（和文）「存在論」の構造変化の研究: 初期存在論とデカルト主義哲学の交錯とその展開の分析

研究課題名（英文）Research on the structural change of Ontology: Analysis of the interaction of early Ontology and Cartesianism

研究代表者
今井　悠介（Imai, Yusuke）

慶應義塾大学・文学部（三田）・訪問研究員

研究者番号：７０８３８５３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：初期存在論の代表的哲学者であるクラウベルクの存在論を中心に、存在論の創始者ティンプラー、およびゴクレニウス、アルステッド、カロフといった初期存在論の哲学者、およびヴォルフ、バウムガルテンの存在論のテキストを、17世紀初頭から18世紀半ばにかけて成立した新たな学問である「存在論（オントロギアOntologia）」の生成と展開の過程として分析する研究を行なった。思考上の存在を含む存在者の一般属性論として、伝統的形而上学を引き継ぎつつ始まった「存在論」が、クラウベルクの主著『オントソフィア』第2版を嚆矢として、同じく17世紀に始まったデカルト主義哲学と交錯し、融合していく過程を部分的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
17世紀以降の近世の哲学は、現代社会を形づくる基盤となった思想である。デカルト哲学や合理論については研究の蓄積があるが、本研究で分析した「存在論」については、その重要性にもかかわらず、世界的にも研究が未だあまり進んでいない。この「存在論」は、中世以降の伝統的哲学と近代思想の基盤となるカント哲学との間を埋めるミッシング・リンクであり、近代的思考の成立を分析するためには決して見過ごすことのできない重要な思想である。本研究は、この「存在論」をデカルト哲学との交錯・融合という観点から近世哲学史に位置付ける試みである。また、西洋の存在に関する思想が近世でどのように展開したのか、その一端を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research project is to analyze the origin and development of Ontology (Ontologia), a new discipline that emerged from the early 17th century to the mid-18th century. In order to accomplish this, we have scrutinized the writings of prominent figures in early Ontology such as Clauberg, who is considered one of the leading philosophers in the discipline, as well as Timpler, the founder of Ontology. Additionally, we have analyzed the works of early Ontological philosophers including Goclenius, Alsted, and Calov along with those of Wolff and Baumgarten. Our research has provided partial insights into the process through which Ontology, initially conceived as a theory concerning the general attributes of beings , including those of beings of thought, taking over some elements of traditional metaphysics, intersected and merged with Cartesian philosophy. This transformation began with the second edition of Clauberg's influential work, Ontosophia.

研究分野：哲学

キーワード：存在論　デカルト　クラウベルク　形而上学　近世哲学　近世スコラ哲学　ヴォルフ　バウムガルテン

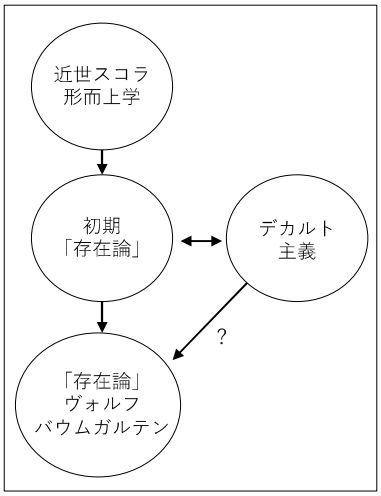
※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

17 世紀初頭～18 世紀半ばに成立した学問である「存在論」は、「最も普遍的な存在者」に備わる性質を探求することで、存在について問う形而上学の一分野である。「最も優れた存在者」をモデルに存在について思考する学である「神学」から、この「最も普遍的な存在者」、すなわちいかなる存在者にも見出される一般的特徴をモデルに思考を展開する「存在論」へと、形而上学の中心が中世～近世の哲学史を通して移行していった次第が近年明らかになりつつある。この「存在論」という学の誕生は、存在を問う人間の思考の変遷を象徴していると言える。近年の研究の進展により、従来近代哲学の始まりと考えられていたデカルト哲学の成立とほぼ同時代に、しかしデカルト哲学とは独立に、主にドイツ、オランダのプロテスタント系学校哲学の系譜において、この「存在論」が新しく成立したことが明らかになりつつある。また、この学は「最も普遍的な存在者」を探求するという中世哲学のスコトゥス主義の系譜を引き継ぎつつも、認識可能性から存在を捉えることによって形而上学を抜本的に改革するという近世特有の性格を、デカルト哲学と同じく持っている。この異なる起源を持ちながらも近しい性格もある「存在論」とデカルト主義との関係は、資料の不足もあり、従来十分に検討されてきたとは言い難い。初期「存在論」についての研究が近年国際的に興隆しつつあるため、デカルト哲学とルーツが異なることについては明らかになってきた。しかし、両者の哲学的な体系構造の差異については、未だ十分に研究が進んでいない。

このような世界的な研究状況の中、研究代表者は「最も普遍的な存在者」を探求する「存在論」と、デカルト哲学とが、その根本の構造において対立するものであるということを以前の研究で明らかにした（科研費・学術振興会特別研究員奨励費）。そしてその両者の矛盾に対する葛藤が、「存在論」の初期の代表的哲学者であり、後にデカルト主義者となったクラウベルクの主著『オントソフィア』の数度に渡る改訂の内に見出されることを明らかにした。クラウベルクは両者の調停を半ば断念するのだが、後に「存在論」という学を確立した哲学者であるヴォルフは、「個別的なものを重視する」、「私（エゴ ego）」といったデカルト主義の要素を取り込み、「存在論」の体系を構築した。したがって、「存在論」は、その展開の過程において、起源を異にするデカルト主義の要素を取り入れ、融合し、独特のアマルガムな哲学を形成した、というのが本研究の背景となる研究代表者による当初の仮説であった。



存在論の系譜関係

２．研究の目的

本研究は、「存在論」の初期の生成から、異質なデカルト主義を取り込み発展・確立するに至る系譜を、その都度の体系構造の差異を分析しつつ明らかにすることを目的とする。具体的にはティンプラー、ロルハルドゥス、ゴクレニウス、アルステッド、カロフ、クラウベルクらによる初期「存在論」の根本モチーフを整理した上で、主にヴォルフ、バウムガルテンの「存在論」との差異を分析する。方法としては、デカルト主義の諸要素を両者がどのように取り入れ、初期「存在論」から展開させているのかを分析する。

３．研究の方法

一次文献（主にラテン語）の精確な読解を基本としながら、とりわけ「存在論」の体系構造に着目しつつ分析する。クラウベルク以降の哲学者については、デカルト主義の要素がどのように当初の「存在論」の体系構造に影響を与えているのかを検討することによって、「存在論」とデカルト主義との交錯・融合を分析する。以上を基本方針としつつ、具体的には次のように進めた。

まず、初期「存在論」についての二次文献を整理し、基本的な論点を整理・確認する。また、ティンプラー、ロルハルドゥス、ゴクレニウス、アルステッド、カロフ、クラウベルクらの初期「存在論」のテキストを分析することで、「存在論」の根本的なモチーフ、構造を明らかにする。具体的には、学の対象をどのように規定しているのか、基礎概念である「無」と「或るもの」、および「存在者」をどのように規定しているのか、矛盾律などの原理をどう規定しているのか、等々を分析する。また、各著作の目次の項目を整理することによって、体系の構成にどのような差異が見られるのかを分析し、比較対照表等を適宜作成しつつ、その上で、初期「存在論」に共通する根本構造を抽出する。

続いて、ヴォルフとバウムガルテンの「存在論（Ontologia）」のテキストを検討し、上記の初

期「存在論」と異なっている部分を分析する。主に着目するのは、デカルト主義的な要素をどのように取り込み、初期「存在論」の構造とどのように折り合わせているか、である。これによって、「存在論」に取り入れられたデカルト主義的要素を整理し、それぞれの体系構造のどの部分に取り入れられているのかを分析し、取り纏める。以上を総括し、初期「存在論」から、デカルト主義を取り込んで、ヴォルフ、バウムガルテンらが「存在論」的思考をどのように展開・転回させていったのか、「存在論」的思考の系譜学を描く。

４．研究成果

ヴォルフについては、「存在論（Ontologia）」における主要著作である、『第一哲学あるいは存在論（*Philosophia Prima sive Ontologia*）』（1730 年）のテキストを、初版のラテン語原典に基づいて検討した。特に、「プロレゴメナ」における明晰判明性概念や、原理である矛盾律の導入における思惟への依拠など、初期「存在論」と比べデカルト主義的と思われる要素を中心に検討を加えた。対比項として念頭に置いたのは、初期「存在論」の中心的哲学者の一人であるクラウベルクの主著『オントソフィア』である。成果として、ヴォルフでは「知解可能なもの」や「存在者」などの基礎概念に先立って、矛盾律や充足理由律などの原理がまず論証され、またこの「存在論」における「論証」の必要性が強く強調されるが、この形而上学の構造や、論証をきわめて重視する姿勢はティンプラーやアルステッド、クラウベルクら初期「存在論」と全く異なっていること、またそれが、ヴォルフが展開した旧来のスコラ的「存在論」批判と密接に結びついていることが明らかになった。また同時に、J. Ecole や J-P. Paccioni らの先行研究を批判的に検討し整理した。ただ、以下で論じるバウムガルテンについての研究とも共通の課題によって、未だ論文化には至っていない。

バウムガルテンについては、『形而上学』の第一部「存在論（Ontologia）」のテキストを、第 4 版（批判校訂版）のラテン語原典に基づいて検討した。特に、存在者の規定の仕方や、形而上学の規定、学の主題の規定、そして「存在論的」原理の記述や導入の仕方など、重要かつ初期「存在論」と比べデカルト主義的な要素が加わりうる箇所を中心に検討を加えた。対比項として念頭に置いたのは、初期「存在論」の中心的哲学者の一人であるクラウベルクの主著『オントソフィア』である。成果として、形而上学の規定が「人間の認識における第一の諸原理の学」とされており、伝統的規定により近い初期「存在論」のものから刷新されていること、その上で、「存在者の一般的な諸述語の学」とされる「存在論」と形而上学が接続されていることが確認された。また、存在者の規定において「連結（nexus）」が欠かすことのできない要素として入っており、原理の一つである充足理由律が存在者の規定に大きな影響を与えていることを確認した。これら 2 点は、初期「存在論」と比べて、デカルト主義的要素と言える点である。しかし、以下で述べる、研究の過程で新たに浮かび上がってきた課題によって、これらの成果は未だ論文化には至っていない。

ヴォルフとバウムガルテン、そしてそれに先行して行っていた初期「存在論」の研究の過程で新たに見出された課題は２つある。一つは、はたして「デカルト主義」とは精確には何を指すのか、という課題である。研究当初は、明晰判明という徴表の重視や、コギトなど、デカルトに特徴的な論点を、また、ライプニッツの哲学をデカルト主義の潮流の一つとみなすことで、（ライプニッツと深く関わる）充足理由律の使用などを初期の「存在論」とは異なる「デカルト主義的要素」とみなし、分析を行おうと考えていた。しかし、たとえばヴォルフに顕著な数学をモデルとした「論証」を重視する姿勢や（ライプニッツと関連があるが、「デカルト主義」と呼んでよいのか、懸念がある）、バウムガルテンの「連結」など、どこまでを「デカルト主義」と呼んで良いのか、また、何を「デカルト主義」と規定すべきか、そこがやや曖昧であるし、またそれを規定するためには、逆に、何が「存在論」的であるのかを、より精確に規定する必要があると思われた。そこに、本研究の過程で（予期せず）浮かび上がった、以下のもう一つの課題が加わる。

もう一つの課題とは、初期「存在論」の諸テキストを分析する過程で、「存在論（Ontologia）」に、当初の予想を超えた複数性と、複層的な系譜関係が見出されたことである。これはとりわけ、1～2 年度目に初期「存在論」について研究する過程で明らかになっていった課題である。当初は、初期「存在論」に共通する構造を分析した上で、そこに新たに加わる要素として、ヴォルフらクラウベルク以降の「存在論」の哲学者に存するデカルト主義的な部分を分析する予定であった。ところが、ティンプラーやロルハルドゥスといった「存在論」の創始者や、ゴクレニウス、アルステッド、カロフら初期「存在論」を代表する哲学者による「存在論」の生成と発展を検討する過程で、当初の予想を超えた「存在論」的形而上学自体の多様性・複数性、およびその系譜関係の複雑性・複層性が浮かび上がってきた（カルヴァン派、ルター派の間の「学の主題」の規定の差異や、両派を跨いだ影響関係など）。このように、「共通した構造」といったものを見出す前に、デカルト主義との融合以前の、初期「存在論」そのものの生成・発展を、その複数性を視野に入れつつそれ自体としてより詳細かつ広範に分析する必要があることが明らかになった。このような新たな課題が生じたことにより、本研究は、当初の予定以上に（ヴォルフ、バウムガルテンよりも）初期「存在論」自体の研究を重視し、進めていく結果となった。このような初期「存在論」自体の研究が進まなければ、それとの対比で浮かび上がる「デカルト主義」的なものも精確に決定できないと考えられたからである。

「存在論」初期の生成と発展については、主に 1～2 年度目に、「存在論（Ontologia）」という

概念こそ使わないものの、その実質的な創始者であるティンプラーの形而上学から、「存在論（Ontologia）」という言葉の発明者であると現在みなされているロルハルドゥス、そしてこの二者と関わりがあり、「存在論」の発展に深く関わるゴクレニウス、の三者によって徐々に「存在論」という新たな学が形をなし、生まれていく様を、先行研究も整理しつつ、ラテン語原典のテキストに基づいて分析した。特に、ティンプラーによる形而上学の規定と「抽象」に関わるテキストを分析することで、ティンプラーとゴクレニウスの間にある連関を新たに明らかにしたところに本研究の新規性がある。この成果は論文や研究会での発表の形で公表したほか、2022 年に受理された学位申請論文（今井悠介「デカルト形而上学研究―存在論の系譜、主にクラウベルクとの対比のもとで―」）において、その成果の一部を取りまとめた。また、初期「存在論」の代表的哲学者であり、かつのちにデカルト主義者へと転向する本研究の鍵の一つであるクラウベルクの「存在論」と、デカルトの形而上学との対立点について、「存在するもの」に関する両者の規定の差異を分析することで検討した。その結果、デカルトの影響を受け、『オントソフィア』第 2 版では初版にあった「存在するもの」についての規定が（知性の外の存在を考察しない、という明確にデカルト主義的な方向性で）改訂されるが、それでも依然、「矛盾をその内に含まない」という、デカルトとは異なる規定になり、かつその理由が『オントソフィア』の体系構造に由来する、ということを明らかにした。この研究成果は、研究会の口頭発表の形で公表した。

これらの初期「存在論」に関する研究を遂行している過程で、上述の二つの課題が明らかとなった。とりわけ、初期「存在論」の研究においては、（「存在論」自体の複数性・複層性という）後者の課題が重要である。初期「存在論」それ自体が生成・発展・分化する過程を、その複数性に目配りしつつ、より詳細に分析する必要がある。具体的には、ヴォルフの頃には「存在論」的原理と呼ばれる同一律、矛盾律などが存在者の規定に先立って検討されるが、初期「存在論」のクラウベルクにおいてはこのような柱となる「存在論的」原理と呼ばれるものは未だ確立されていなかった。このような「存在論」的原理と呼ばれるものが確立されていく（おそらく他の諸要素と同時並行的に進んでいく）過程を分析する必要がある。また、創始者であるティンプラーの形而上学においては、「存在論」特有の構造的な体系が未だ確立しているとは言い難い。他方で、クラウベルクの頃には、「存在論」はある程度「体系的」と呼びうる叙述になっている。こうした「存在論」の体系化という事態は、おそらくクラウベルクに先立つケッケルマン、アルステッドら、「体系（system）」を重視した「存在論」の哲学者たちによって試みられたのではないか、という見込みが、これらの初期「存在論」の研究を遂行する過程で新たに得られた。この仮説を検証することが、今後の課題として残されている。

また、本研究課題とは直接の関係はないが、2019 年度から、アドリアン・バイエ『デカルトの生涯』の翻訳プロジェクトに共訳という形で参加した（「日本語版への序」翻訳、および各章翻訳検証担当）。本書は 17 世紀に刊行された、デカルトに関するきわめて重要な古典的伝記であり、全訳は本邦初の試みである。この翻訳は、本研究期間中の 2022 年に、アドリアン・バイエ『デカルトの生涯 校訂完訳版』（山田弘明、香川知晶、小沢明也、今井悠介訳、アニー・ビトボル-エスペリエス序・注解）、工作舎、2022 年。として刊行された。本書は、17 世紀の同時代的な受容の文脈を示すという点でデカルトやデカルト主義の理解に資するところが大きく、デカルト主義と「存在論」の交錯を分析する本研究課題にも益するところがある。また、2022 年度には、ニコラ・ポワソン『『方法序説』注解』を、17 世紀当時の原典から直接翻訳し（共訳）、ニコラ・ポワソン『デカルト『方法序説』注解』（山田弘明、クレール・フォヴェルグ、今井悠介訳）、知泉書館、2022 年。として刊行した。本書は、17 世紀に刊行された最初期のデカルト哲学についての注釈書であり、デカルト哲学研究においてもしばしば参照される書物である。本邦初訳となる。本研究課題とは直接の関係はないものの、最初期のデカルト解釈、およびデカルト主義についてのテキストを含み（たとえばクラウベルクのデカルト主義的論理学書についての記述など）、デカルト主義と「存在論」の交錯を分析する本研究にも益するところは大きいと思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 今井悠介	４．巻 13
２．論文標題 17世紀初頭の「存在論（Ontologia）」の生成と展開について：ティンプラー、ロルハルドゥス、ゴクレニウス、クラウベルク	５．発行年 2021年
３．雑誌名 成城大学共通教育論集	６．最初と最後の頁 51-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 今井悠介	４．巻 -
２．論文標題 デカルト形而上学研究-存在論の系譜、主にクラウベルクとの対比のもとで-（学位論文）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 学位論文（東京大学）	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 今井悠介
２．発表標題 「原因からの論証」と存在論の体系-クラウベルク『オントソフィア』初版(1647年)の体系構成について-
３．学会等名 京都哲学史研究会+JSPS基盤研究(C)16K02223:(研究代表者・武田裕紀)主催ワークショップ「近代初期における学知の方法と論証」
４．発表年 2019年

１．発表者名 今井悠介
２．発表標題 存在論(Ontologia)とデカルトにおける存在するものについて
３．学会等名 京都ヘーゲル讀書會 令和四年度冬期研究會
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

1．著者名 アドリアン バイエ(著)、山田弘明、香川知晶、小沢明也、今井悠介(訳)	4．発行年 2022年
2．出版社 工作舎	5．総ページ数 1304
3．書名 デカルトの生涯　校訂完訳版	

1．著者名 ニコラ・ポワソン(著)、山田弘明、クレール・フォヴェルグ、今井悠介(訳)	4．発行年 2022年
2．出版社 知泉書館	5．総ページ数 312
3．書名 デカルト『方法序説』注解	

〔産業財産権〕

〔その他〕

今井悠介、書評「ドゥニ・カンブシュネル(津崎良典訳)『デカルトはそんなこと言ってない』晶文社、2021年」、『図書新聞』、武久出版、3533号、2022年3 月5日。
今井悠介、書評「アントワーヌ・アルノー『ポール・ロワイヤル論理学』、Howard Hotson, The Reformation of Common Learning、スチュワート・ウッズ『ユーロゲーム』」、『フィルカル』、株式会社ミュー、Vol. 7、No. 1、pp. 18-19、2022年4月30日。
今井悠介、書評「上野修、鈴木泉編『スピノザ全集III　エチカ』、Jean-Luc Marion, Questions cartesiennes III、『ダンジョンズ&ドラゴンズ　デラックス・プレイ・ボックス』」、株式会社ミュー、Vol. 8、No. 1、pp. 42-43、2023年4月30日。

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関